

平成27年8月24日(月)

老球の細道158

## クレイマー、クレイマー(その1)

会津バスケットボール協会 室井 富仁

映画『クレイマー、クレイマー』は1979年アメリカで上映された。アウエリー・コーマンの小説をロバート・ベントン監督が映画化し、ダステイン・ホフマン主演でアカデミー賞作品賞も受賞した有名な映画である。映画の原題は『原告クレイマー、被告クレイマー』でニューヨークマンハッタンに住む仕事熱心の会社員ダステイン・ホフマン演じるテッド・クレイマーと子育て、家事に明け暮れる妻のジョアンナ・クレイマーとの離婚裁判である。夫が仕事に明け暮れ、子育てや家事の全てを妻に押し付けたことからトラブルは始まった。当時この映画を観た私は他人事ではないと危機感をつのらせたことがある。

バスケットボール指導現場での「クレイマー、クレイマー」は、保護者から学校へ、保護者からコーチへと矛先が向けられる問題。私達コーチは子どものために良かれと思ってやっていることが、いついかなる時保護者からのクレイマー攻撃にあうかわからない。

そもそも保護者は子どもを育てるためのコーチの同志である。協力こそすれ決して敵対関係に陥ってはならない。良好な関係を築くために日夜努力を忘れてはいけない。バスケットボールにファンダメンタルがあるように、保護者への対応にもコーチの心構えのファンダメンタル「BIG3」がある。常に肝に銘じたい。

### 1・クレームはあってあたりまえ。

大多数の親は子どもの幸せを願う。わが子が辛い思いをしたり、嘆き悲しむ姿に我慢できなくなるのはあたりまえ。

2・クレームを面倒なことにとらえて保護者に対して敵対意識をもってはいけない。共に問題解決を図るパートナーとして手を携えることが重要である。

3・「話せばわかる」「聴けば解決する」だけでは解決しないこともある。時には「ならぬことはならぬ」と言わなければならないときもある。

このようなファンダメンタルのもとで常日頃から保護者との良好な関係が築きあげられるようにコーチの「保護者に対する7つの習慣」も忘れてはいけない。

1・子どもに対して最終的な責任を負うのは親であることを忘れない。

2・親の立場を尊重する。

3・親に対して多くの情報を与え、日頃の活動に積極的に建設的に参加してもらう。

\*大会、練習試合観戦、練習見学。

\*イベント(芋煮会、送別会、招待試合等)

4・親とコーチが対立している状況で選手がプレーすることのないように配慮する。

5・親に対して、用具、ユニフォーム、部費、試合前の食事、輸送などについて協力してもらえらることを伝えること。

6・子どもに深刻な問題(ケガ、盗難、暴力、異性問題等)や、選手として不適格な問題が起こったら直ちに親に連絡すること。

7・すべての親が熱心であるとはかぎらない。望むような反応はないのが普通。しかし、常に親に対して必要な情報を与え、協力を求めることを怠ってはいけない。

コーチはクレームと共に成長する。次号はクレームが来たらどう対処するか。(続く)